

〈人間系教育学域 FD 委員会報告〉

人間系教育学域共催学会大会報告

人間系教育学域共催学会大会報告

全国大学国語教育学会第122回大会報告

2012年5月26日(土)・27日(日)の両日、全国大学国語教育学会第122回筑波大会を、筑波大学第2エリアを主な会場として開催した。

全国大学国語教育学会は、1950年、大学の国語教育講座を担当する教員を中心に、国語教育研究の充実と発展を期して結成された。現在は、会員の層も、大学・附属学校の教員、大学院生から、小・中・高等学校等の教員へと広がって、会員数が1100名を超える研究団体になっている。国語教育の研究領域を中心に、日本教育学会や日本読書学会など関連する諸学会との連携を図り、着実に発展を続けて、文字通りわが国を代表する国語教育学会として不動の地位を築いている。

大会は年2回開催され、これまでに122回の開催実績がある。筑波大学で開催されるのは今回がはじめてで、両日とも好天に恵まれ、参加者数は457名であった。人間系教育学域教員・院生をはじめ、人文社会系教員など、多くの本学関係者の参加・協力の下で実施された。

大会は、開催前日の午後に開かれた学会誌編集委員会と常任理事会（於オークラフロンティアホテルつくば）に続いて、第1日目午後には理事会・総会、懇親会が、第2日目午後には、各種委員会が大会会場内で開催された。

研究発表関係では、個人研究発表が87件、ラウンドテーブル3件、パネルディスカッション1件、課題研究発表1件、公開講座1件で、2日間にわたって行われた。

学会主催で行われたプログラムとしては、第1日目のパネルディスカッション1件、第2日目の課題研究発表1件、公開講座1件がある。パネルディスカッションのテーマは「国語教育と日本語研究の新しいかわり方」で、筑波大学名誉教授湊吉正会員の基調報告の後、筑波大学人文社会系矢澤真人会員をコーディネーター

にして、同 砂川有里子氏（非会員・招待）、早稲田大学森山卓郎氏（非会員・招待）、文部科学省山下直会員の3名を登壇者として進められた。国語教育研究は、言語の教育という特質から「言語研究」の成果をどう位置づけるかが基本的な課題となっているが、今回、4名は日本語学の専門家としての立場から熱心でかつ展望豊かな議論を行った。課題研究発表は、本学会の研究部門委員会が企画・実施しているもので、今回のテーマは「国語教育研究手法の開発(1)―発達心理学研究との交流を通して―」である。横浜国立大学高木まさき会員をコーディネーターとして、筑波大学内田伸子氏（非会員・招待）、白梅学園大学無藤隆氏（非会員・招待）、山形大学小川雅子会員の3名を登壇者として進められた。このシリーズは、テーマが示すように、国語教育研究における研究手法の多様化を受けて、関連する学問領域の最新の研究成果を研究手法の視点から再検討することを目的としたものの第一弾である。第二弾は、「国語教育研究手法の開発(2)―社会学・文化人類学との交流を通して―」が予定されている。公開講座も研究部門委員会の企画・実施によるもので、会員はもとより、非会員の現職教員の参加（公開講座のみ参加費無料）を想定してテーマが選ばれている。今回は、「説明文教材の研究手法(2)―教材開発・授業開発―」である。

これらの企画からも明らかのように、本学会は、関連する学問研究領域との積極的な交流を進めると同時に、研究成果の発信にも努めている。

本学会の開催にあたり、教育学域をはじめ、多くの方々からのご協力・ご支援をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

(文責：全国大学国語教育学会理事長 塚田泰彦)

関東教育学会第60回大会報告

2012年11月11日(土)、関東教育学会第60回大会を、筑波大学の東京キャンパス(文京校舎)を会場として開催した。

関東教育学会は、1953年、日本教育学会の地方支部会として発足した。会員数は決して多くないが、本学会は、関東地方において、地道な研究活動を60年にわたって続けており、現在、いわば若手研究者の登竜門的な学会の役割を一面では担うようになってきている。

大会は年1回開催され、これまでに60回の開催実績がある。筑波大学で開催されるのは、東京教育大学時代を含め、1963年、1998年に続いて、今回で3回目である。会員の交通の便を配慮するとともに、筑波大学の文京校舎の改装・開所を記念する意味で、東京キャンパスで行われた。筑波地区の関係者にとっては遠い会場となったが、根津朋実大会事務局長を中心に、人間系教育学域教員・院生をはじめ、多くの本学関係者の参加・協力の下で実施された。

大会は、例年通り、1日間の開催であった。午前9時30分から、研究発表が三つの会場で行われた。14件の個人発表があった。その後、理事会と総会に続いて、公開シンポジウムが開催された。

シンポジウムのテーマは、「学校は改革でよくなったか」であった。「改革」に対して立場の違う3名をシンポジストとして選出し、また司会者以外に、広い視野から質問・意見を出す1名の指定討論者を加えることになった。シンポジストは、前高知県知事・早稲田大学客員教授・慶應義塾大学特別招聘教授の橋本大二郎氏(非会員・招聘)、筑波大学の樋口直宏会員、早稲田大学の佐藤隆之会員であり、指定討論者は上智大学名誉教授の増淵幸男会員であった。

橋本氏は、昨今の教育改革のさきがけとなった「土佐の教育改革」を行政の立場から推進した人物である。橋本氏からは、「土佐の教育改革」の実態と真実について語ってもらいながら、昨今の教育改革についても持論を展開した。その過程で、「市場原理に基づく改革の問題点を指摘するだけでは事は解決しない」、「原発事故を

起こした原子カムラと同様、教育ムラになっていないか、身内意識への反省なしには、無用な改革論議は止められない」という厳しい指摘が研究者に向けてあった。最後に、「手術好きの執刀医のメスで傷つく前に、体質改善のための改革に、教育界自らが立ち上げる時ではないか」という、激励のメッセージが発せられた。

学校選択制・学校評価・小中一貫教育・「市民科」などの品川区の教育改革に研究者の一人として参画した経験をもつ樋口会員からは、品川区とつくば市の小中一貫教育の共通点と相違点とともに、そこでの成果と課題も明らかにされた。また、小中一貫教育についての成功の鍵として、「それに関わる教員、児童・生徒、さらには地域住民に対して、その意義を感じるようにどのような働きかけを行うかが重要である」という指摘がなされた。

ラヴィッチ著『学校改革抗争の100年』の訳者の一人である佐藤会員からは、ラヴィッチの答えとして、「テストと選択」に基づく改革は学校を改善できなかったこと、「よく」する改革は、教養主義に基づく「カリキュラムと教授」の立案と実践であること、が語られた。それと同時に、ラヴィッチの見解を批判する研究者の論も取りあげ、「テストと選択」に基づく学校改革に対するもう一つの代案についても紹介があった。

また、増淵会員からは、それぞれ3名の発表に対して的確な質問があった。それが呼び水となって、フロアからの忌憚のない質問が発せられた。その結果、司会者が議論に引き込まれ、終了時間を40分延長してしまうぐらい、会場の雰囲気盛り上がったシンポジウムとなった。

なお、本学会の開催にあたり、教育学域をはじめ、多くの方々からのご協力・ご支援をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

(文責：関東教育学会理事、第60回
大会実行委員長 吉田武男)